

## 近世における「学問」の誕生 -- 中江藤樹の教導思想 --

著者	高橋 恭寛
号	24
学位授与機関	Tohoku University
学位授与番号	文博 第425 号
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/59403">http://hdl.handle.net/10097/59403</a>

たか はし やす ひろ  
高 橋 恭 寛

学 位 の 種 類	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	文博第 425 号
学位授与年月日	平成25年 3 月27日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
最 終 学 歴	東北大学大学院文学研究科 (博士課程後期 3 年の課程) 文化科学専攻
学 位 論 文 題 目	近世における「学問」の誕生——中江藤樹の教導思想——
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 佐 藤 弘 夫    教 授 三 浦 秀 一 准教授 片 岡       龍

## 論 文 内 容 の 要 旨

### 序章 問題の所在

本論文は、近世前期の儒者中江藤樹 (一六〇八年～一六四八年) が自らの儒学理解を「同志」(門弟・学友を指す) たちに〈教示〉した内容を分析することによって、近世前期における「学問としての儒学」の位置を再考することを目的としている。「学問としての儒学」は、その受け手であり実践者であるところの「学習者」の存在と彼らへの〈眼差し〉を必要とするであろう。そこで本論文は、中江藤樹という儒者がどのようにすれば学問成就を果たせるのかという「方法論」を考慮し、初学者たちが理解し実践出来る〈手立て〉の〈教示〉を模索していたことを明らかにしてゆくことにしたい。

### 第一章 中江藤樹はどのように語られてきたのか

まずは、近世・近代を通じて「これまで藤樹の思想はどのように語られてきたのか」ということに焦点を当て「藤樹の思想」理解を概観した。一般的に藤樹は「日本陽明学の祖」と見なされている。その思想的側面も確かに有する。ただ戦前から「陽明学」とは一線を画して藤樹の思想的独自性が分析され、戦後「陽明学者」としての藤樹像は解体されてゆく。その後、藤樹がどのように「中国思想」を受容し「心学」を確立したのか、という思想的核心部の構造解明にばかりに注目が集まるが、現代に至るまで「心学者」像を刷新することが出来ていない。その上、藤樹は比較的社会的発言の少ない儒者であり、社会史的に藤樹を位置づけることもまた困難である。旧来の儒学史的位置付けが退けられた後に、改めて藤樹が思想史のなかにどのように位置づけられるのか、新たな藤樹理解が生み出されているとは言えない。

## 第二章 「学問」へのいざない——「福善禍淫」の論理と「人と禽獣の弁別」

そもそも藤樹の生きた近世前期は、「儒学」が何たるか未だ広く共有されていない時代であった。そのような時代のなかで藤樹は、誰もが「儒学」を学ばねばならない理由をどのように説いたのかをまず検討せねばならない。藤樹は儒学が万人のための学問であるという主張をどのように人々に向けて提示していたのであろうか。藤樹は〈「学問」を行うとどのような変化があるのか〉、及び〈何のために「学問」をせねばならないのか〉など、人々の間に浮かぶであろう素朴な問いに答える。

そもそも藤樹の学問の目的は、内心に存する善なる本性「明德」を正しく発揮すること（明明徳）であった。この「明明徳」の実現は、内心の道德性の実現に留まらず、「天」との〈合一〉という超越性をも有していた。しかし、「明明徳」は同時に、定められた「運命」すら動かしてしまうような〈現実世界に働きかける〉可能性をも有することを人々に説いたことを明らかにした。

## 第三章 初学者に向けた教示の模索

上述の通り、藤樹が「明明徳」を中心とした独特な修養論を説いていたことは夙に知られている。しかし、どれほど人々を鼓舞しようとも、誰もが簡単に学問へと着手出来るわけではない。藤樹は、所謂「朱子学」で説かれた「主一無適」などの方法が、初学者にとって実現困難なものと考えていた。そのため『原人』『持敬図説』という著作のなかで、初学者でも行い得る「敬」（内心の慎み）の保持を説き、独特の「敬」理解を示して修養論を構成した。初学者への〈手立て〉が焦点であり、藤樹は決して所謂「朱子学」の体系自体を否定したわけではない。藤樹ははじめ「朱子学」的な学問手順に理解を示していた。

そもそも「朱子学」体系の中心には、「四書」と称される『大学』『論語』『孟子』『中庸』という四冊の經典が位置している。『大学』に始まり『中庸』に終わる四テキストによって、学習者は「朱子学」体系の基本を学ぶ。ただし初学者は『大学』へ入る前に、先ず学問の入り口として『小学』を学ばねばならない。『大学』の学習が、〈窮理〉といった「道理」の探究である一方で、『小学』の学習は眼前の諸事・諸物に即して礼儀作法や日常道德の修得を目的としていた。掃除や来客応対など（当時における）具体的な修身作法の教育書を〈四書〉の前に整備し、「心」や「道理」の問題に入り易くする順序を示したのであった。

藤樹は『首経考』という著作によって、『小学』を利用して「仁徳（明德）」へと至る学問の道筋を提示した。初学の段階においては、『小学』の礼法という「事」を通した入学の〈手立て〉を構想していたのであった。しかし礼法の遵守は、規範の固定化の危険性を胚胎している。『小学』という書物もまた礼法を説いた書である以上、その危険性を有している。そこで藤樹は『論語郷党啓蒙翼伝』（以下『啓蒙翼伝』）を著して、具体的礼法の墨守を退けた。『論語』郷党篇に記載された様々な孔子の言動・礼法は、「影迹」として相対化される。しかしこの孔子の「影迹」は、その場その時の限定的場面における最適な事跡でもある。『啓蒙翼伝』は、この「影迹」を通して「影迹」の背後に存する、眼に見えない孔子の心「聖心」を理解することを求めた。「郷党篇」の読者が、「郷党篇」の記述たる「影迹」を読解して「聖心」（孔子の心）を理解するとは、その時その場面における最適な行為を成り立たせている「凡例」の体得を意味した。だが『小学』のような具体的礼法の墨守を退けたはずの『啓蒙翼伝』のなかに、『小学』の影響が垣間見える。孔子の言動・礼法（影迹）を通した「聖心」の把握は、「事」の次元を通した「明明徳」の実現という点で『首経考』以来の課題を継承していると言える。

さらに藤樹は、道教の神「大乙神」を儒教の「皇上帝」を同一存在と見なし、大乙神の霊像を祭る実践を説いた。この大乙神信仰も「事」から「明明徳」の実現に着手する〈手立て〉に位置づけられる。「中

人以下」の学習者たちにとって、「聖心」や「大乙神」などが見聞出来ない存在であり、修養へ向かうことを困難とした。そこで藤樹は、「中人以下」の学習者にとって、眼前の霊像を祀ることが〈手立て〉となると説いていたのである。このように眼前の「事」の次元を〈手立て〉として心法へ向かう〈教示〉は、藤樹が思索を始めてから大乙神信仰に至るまで、一貫して模索されていたのであった。

#### 第四章 二つの「持敬図」

さて様々な〈手立て〉によって無事学問へと着手出来たととしても、そもそも「敬」の保持自体が困難であるという認識が藤樹にはあったと既に述べた。そもそも『持敬図説』という書は、どのように「敬」を保持すればよいのか、そして「敬」を保持する際の構造を図示し、学習者への〈手立て〉を論じたものである。この「敬」を保持する修養論にも藤樹なりの試行錯誤があった。『持敬図説』は、文字通り「持敬図」とその解説とで構成されている。この「持敬図」は、ドーナツ状の二重円と円内に方象を有するかたちである。この二重円及び方象に様々な經典の文言が記されている。例えば『全集』にも収められた定稿「持敬図」の外円には、「四端」、「五典」、「七情」という文言が記されている。一方、この定稿「持敬図」の他に、定稿以前の作成とされる真蹟「持敬図」が存在するのだが、こちらでは「正心」を除いた『大学』八条目が記されている。全体的に、真蹟「持敬図」が『大学』中心の文言で構成されているのに対し、定稿「持敬図」は、『大学』のみならず四書全てを用いて「持敬」が構成されていると言える。

真蹟から定稿への変化には、藤樹が四書合一の考えを考慮するようになったことが背景に存すると思われる。それは藤樹が『持敬図説』とほぼ同時期に『四書合一図説』なる書を著し、四書合一の考えを開示していたことから窺うことが出来る。『四書合一図説』で提示した合一の在り方が「持敬図」にも反映されているのだ。

このような「持敬図」の変容からは、「持敬」という修養論の模索が窺える。「持敬図」外円は、「体用」の「用」の部分にあたり、内心から発した外的実践をも意味する。しかし、様々な場面・状況における外的実践を論ずるときに『大学』だけでは狭い。そこで四書全てを「持敬」として組み込んだのであろう。この『持敬図説』もまた『首経考』などで無事入学を果たした学習者に向けた〈手立て〉の一つと言える。真蹟から定稿へ至る模索からは、学習者がどのようにすれば正しく「持敬」を実現し、「明明徳」を果たすことが可能であるのか、という「方法論」の模索を含んでいることに留意せねばならない。

#### 第五章 『翁問答』から見る〈教示〉対象の顕在化

藤樹による〈手立て〉の模索は、晩年に至るまで一貫していた。藤樹の思想展開には、「学習者への視線」を一貫して有するものであった。ただ三九歳頃になると、『持敬図説』を著した三〇代前半と異なり、〈教示〉の重心が変化しているように見える。この変化は、主著『翁問答』と『翁問答改正篇』（以下『改正篇』）との間に見出だすことが出来る。

『翁問答』は、遠方に居る「同志」の求めに応じて藤樹三三歳の時に著されたかな書きの教訓書である。話題は多岐に亘っているが、藤樹の思想性をよく表した代表作として知られている。ところが後年藤樹は、『翁問答』の加筆修正を試みた。志半ばで没したが、残された未完の原稿は『改正篇』として藤樹没後にまとめられる。この『改正篇』にまとめられた原稿のなかで、藤樹が真っ先に加筆修正を試みたのは、「〈正しい学問〉とは何か」という話題であった。『翁問答』での「〈正しい学問〉とは何か」という話題は、「心学」という〈正しい学問〉を説き、「儒学」への道を開示するにとどまっている。一方『改正篇』では、『翁問答』で説かれた〈正しい学問〉の存在は前提である。〈正しい学問〉を知りながらも「〈正しい学問〉に躓いた学習者はどのようにすればよいのか」という方向へと話題の重心が移っ

ているのだ。ここで注意せねばならないことは、この〈教示〉の重心の変化を、思想的核心的変化と読み取ってはならないことである。藤樹は晩年に至るまで一貫して己の説く学問が自らの心を自ら正しく修める「心学」と名付けられるべき学問であることを自覚していた。そのため、学習者に対して自らの心を修める重要性を〈教示〉する点のみに絞れば、『翁問答』と『改正篇』の間に変化は無い。『翁問答』から『改正篇』に至る藤樹の〈教示〉の重心の変化について注目すべき点とは、この「躓いた学習者」という点である。そして『改正篇』にとどまらず、藤樹後半生における〈教示〉の焦点は、この「躓いた学習者」への〈手立て〉が中心となるのである。

## 第六章 学習者に求める振る舞い——独学から講論へ

藤樹の学習者への眼差しを考えるためにも、まずは著書の開示をはじめとして藤樹が「同志」たちに向けてどのような態度で〈教示〉の場に臨んでいたのか〈教示の現場〉を確認し、藤樹が「学習者」にどのような振る舞いを求めていたのかを明らかにしてゆく。

藤樹は、二七歳のとき、親への孝養を理由に致仕脱藩して近江高島郡の小川村へと帰郷した。その後、小川村の藤樹の住居は、彼の学徳を慕って「同志」が集うようになり、晩年には増築もされて「藤樹書院」と呼称されるようになった。「書院」の日常は、「同志」たちとともに行う經典講読であったと思われる。「同志」たちも、漢籍読解の師としての藤樹に期待するところがあった。元々、經典解釈を知る読書人という藤樹の世評は、大洲藩へ奉公している時期に既に形成されていたようである。

ただし經典講読はあくまでも「本末」でいうところの「末」である。本来の学問の「本実」は、經典の単なる読書ではなく、それを通しての心法の実践である。このように藤樹は、書院での実際的な交流などを「末」とし、この「末」から心法に入る道筋を構想していた。ある意味で「事」の次元から学問へと入る〈手立て〉と言えるであろう。それならば、果たして經典読解という「末」から心法に入ることによって「同志」が心法の端緒を掴むことが出来たのだろうか。やはり「同志」たちには、困難を伴ったのであろう。藤樹に向けて心法に着手出来ない悩みを相談する書簡が多数残されている。そのような悩みに対して藤樹は、「独学」を〈教示〉した。結局のところ「心法」は、独りで試みねばならないと返信したのである。学問者が心法に励む場面に、他人が介在することは出来ない。自分の心に焦点を当てた心法は、師友などに頼ることの出来るものではないからだ。

ところが、三九歳頃になると「独学」よりも「師友」との「講論」を先に行うことを説くようになる。師友の交流を「心法」へと入る端緒として自覚的に〈教示〉していることは、少なくともここまで見てきた三八歳以前の書簡のなかに確認することは出来ない。ただし藤樹が特別な「師友講論」理解をしたわけではない。藤樹による師友講論の〈教示〉に注目すべき点は、「心法」の把柄が手に入らない原因を除くために師友講論を一つの契機として、藤樹が自覚的に言及するようになったところである。これは、「独学」では乗り切れない学習者がいたことから藤樹が新たに提示した学問へ入る〈手立て〉であった。

初学者にしてみれば、心を修める「心学」であるからといって、何も手立ての無いところからまさしく「独学」で始められる者は少ない。必ず具体的な日常の実践を入り口として「心」を練らねばならない。その具体的な日常のなかでも、身の回りの他者との交流などが「心」を練るときの実践の場として重んぜられたのである。ここからは、『持敬図説』以来の「初学者には困難である」という認識による〈手立て〉の模索が晩年に至るまで一貫していたことを窺わせるであろう。

## 第七章 藤樹における「慎独」の重視、及び「慎独」に挫ける「同志」たち

それでは、「師友講論」を通して心法へと向かうことが出来た入学者は、無事「明明徳」を実現する

ために「慎独」を果たすことが出来たのであろうか。藤樹の書簡による〈教示〉を追ってゆくと必ずしも藤樹の教え通りに事が運ばなかったように思われる。年代順に書簡を追ってゆくと、藤樹の元に「慎独」がうまく果たせないという相談が、三七、八歳頃、集中的に届いたことが分かる。そこで藤樹は、三九歳頃から「慎独」の前段階として「対算」という外的実践を提示するようになった。「対算」とは、「道德と名利」などを比較考量して善し悪しを定める行為のことである。決して三九歳以前に全く「対算」の語を用いなかったわけではないが、「慎独」の前段階として自覚的に〈教示〉するようになったのは、三九歳以降であった。実際、三九歳を境に、「対算」を前提とせずに「慎独」を専ら〈教示〉する書簡はほぼ皆無となる。

近世前期の社会では、儒学という「学問」が単なる読書や博覧強記と誤解され、多くの人が縁遠いものとされていた。ただそれは、あくまでも「学問」とは縁遠い人々、所謂「世間の人々」の領域であると見なされる。家業を専らとして暇を見出すことの出来ない人々と異なり、「学問」への志を抱いて藤樹のような学者のもとで学業に励む者たちは、確かに世間の人々とは一線を画すると言えるだろう。

ところが、藤樹の元に集まった学習者でさえ、『改正篇』の改正意図や「師友講論」の必要と同様に、「慎独」の前段階の着手の処を必要とした者たちが少なくなかった。すなわち、藤樹の元で学問を励んでいた者たちですら「慎独」をはじめとした「学問」が理解出来ず、挫ける学習者たちが存在していたのである。ただ藤樹は、そのように挫けた学習者を見捨てることはなかった。挫けることは仕方が無い。問題は、挫けたのならば、どうすれば再び学問へと着手出来るかである。つまり、藤樹三九歳以降の課題とは、挫けた学習者の挫けた後にどのような〈手立て〉によって学問成就を果たすことが出来るのかという点にあったと言える。

## 第八章 「立志」を〈教示〉することの問題

ここまで見てきたように、「同志」から送られてくる相談事は多岐に亘る。しかし、藤樹のもとに届いた相談は、「慎独」のような具体的な修養の挫折の次元に留まらなかった。学問への「立志」を〈教示〉した書簡が数多く残されていることから、藤樹が「立志」の〈教示〉にも言及せねばならない状況に追い込まれていたことが窺える。ただし、藤樹独自の「志」解釈が問題なのではない。藤樹による「立志」の〈教示〉の在り方にこそ注意を払わねばならない。

そもそも学問への「志」を立てることは、学問の前提である。学問を修める「志」が無ければ何も始まらない。それは藤樹に限らない話であるが、藤樹の場合「真志」「仮志」の弁別というかたちで、この〈正しい志（真志）〉を立てることの重要性を説く。

ところが藤樹は、この「志」が挫けてしまうという相談や、そもそも「立志」が果たせないという相談すら受けていたのである。

それらに対して藤樹は、「真楽」の存在について十分理解していないことに「志」が立たない原因を見た。「真楽」について、学習者が正しく理解することで「志」がおのずから立つと藤樹は考えていたのである。そこで藤樹は、饑えや喉の乾きが飲食によって解消されるという喩えを出し、心の苦しみを解消する善なる本性（明德）の存在を理解するよう教示した。善なる本性（明德）を明らかにすることは、現実世界の苦楽を二義的なものと見なし、超越的な「真楽」の境地へと至ることに他ならない。そのため藤樹は、「志」を立てるには「真楽」へ至って苦痛を脱したいと学習者自らが願うようにならねばならないと教示する。これが「同志」に向けた藤樹による「志」の励まし方であった。「立志」は、他者によって左右出来るものではなく、学習者本人の内なる心の問題である。そのため、自力で奮い立たせなければならない問題と藤樹は捉えていた。

ところが最晩年、おそらく絶筆であろう『中庸統解』（四書『中庸』の注釈書）のなかでは、それまでの「立志」の〈教示〉とは趣きを異にする。このとき藤樹は、いくつかの經典本文が「学習者に志を立てさせる」内容であると解釈している。つまり、經典講読という外的契機が「立志」を促すということとを期待する方向へと舵を切っているのである。

藤樹において学問の前提条件であるはずの「立志」が前提ではなかった。「志」の挫ける「同志」に向けて、「志」の保持をどのようにするのがよいのか対応するという「立志」の〈対象化〉がなされている。藤樹の元に集った学習者は、誰もが熊沢蕃山のような俊英ではなかった。藤樹の教えが理解出来なかった者もいれば、実践に挫ける者もいたであろう。そのような次元に留まらず、そもそも学問へと向かう「志」すら立たない者にも〈教示〉を行わねばならなかった。ただ、このような学習者の学問への意識の濃淡にこそ、万人に開かれた「学問」の開示と共有が見られる。それら学問への意識の濃淡にも対応しようとしたところに、万人のための学問を説いた藤樹の面目があると言えるであろう。

## 終章 中江藤樹の思想的地位

以上、明らかにしてきたような「学習者」への〈眼差し〉を有した藤樹の「学問としての儒学」は、ほぼ同時代の儒者である藤原惺窩や林羅山などには見られないのだろうか。

まず、「近世儒学の祖」とも称される藤原惺窩について、その思想的到達点と言われている『大学要略』（一六三〇・寛永七年刊）からは、上からの教化養育の主張は見られても、民衆による道徳的自発性を意識していないとされている。そもそも惺窩を取り巻く交流関係は、惺窩の古い弟子、吉田玄之の存在が大きい。吉田玄之の父親は、豪商角倉了以である。「友社」と評されることもある、京都の都市社会での角倉を中心とした「サロン」的交友関係が惺窩の学問的交流の背景にあるのだ。羅山や堀杏庵もこの関係者から紹介を受けた上で惺窩に師事していることに注意せねばならない。そもそも惺窩の思想性を最も色濃く継承したとされる松永尺五は惺窩とは親戚関係であった。このように縁故を基礎に据えた「サロン」的交友関係を形成していた惺窩からは、万人を「学習者」として受け入れ「方法論」を提示した姿を読み取ることは出来ないのである。

また、松永尺五・林羅山などの惺窩後継は儒学用語の解説を中心とした啓蒙書を著し、儒学思想の理解を深める動きに活躍した儒者であった。尺五は、木下順庵・貝原益軒といった有名な儒者を育てあげた。また羅山は、後の官学・昌平黉へと繋がる私塾を建て、後進指導にあたっている。しかし、彼らが門弟に向けた何かしらの〈教示〉を残しているかということとそのようなものは皆無に等しい。藤樹と同時代の儒者は、まだ己の理解した儒学世界の開示で留まっており、記述の向こうに「学習者」の姿を見ることが出来ないのである。ここに、近世前期の学問状況のなかで「学習者」への〈眼差し〉を有していた藤樹の独自性があるのだ。

藤樹没後、「学習者」を意識したのは、おそらく貝原益軒であろう。益軒は、『大和俗訓』や『和俗童子訓』などのかな書き教訓書を著した「朱子学者」である。これらの教訓書の意義は、狭い専門知とされていた儒学を社会の人々へと「開放」したことにありと評価されている。同時にその内容が『小学』に基づいていることも夙に知られるところである。「忠実」な朱子学者貝原益軒は、入学の道を『小学』と定め、朱子学の体系に則ったに過ぎない。さらに「立志」は学習者の大前提である。益軒の教訓書からは、学問へと努め励ます様々な内容を見て取ることは出来ても、固定的礼法への拘泥や、学問に躓き挫折する学習者などについて考慮したところを見出すことは出来ない。藤樹と異なり、益軒に「学習者」の姿がどこまで見えていたのか未だ審らかではない。

藤樹高弟の淵岡山は、確かに〈手立て〉に関する藤樹の課題を引き継いでいた。しかし、淵岡山以降

の「藤樹学」者たちは、所謂「陽明学」的な藤樹の「心学」理解は見られても、その「方法論」の継承は見られない。藤樹の「学習者」に向けた〈手立て〉は、淵岡山以外に共有されてはいなかったのである。

そのため、このような「学習者」への〈眼差し〉に焦点をあてて、近世の儒学史を描き出されたことはほぼ皆無であろう。確かに躰いた学習者への〈手立て〉のような藤樹の「課題」は、直接的には岡山以外に継承されていないのかもしれない。しかし、本論文で明らかにしてきた藤樹の問題意識は、藤樹を超えて近世思想史に問うべきものを有していると考ええる。すなわち「学問として儒学」は何か、そして儒学を超えて「学問」とは何か、それを改めて近世という時代に問うことが求められる。「学制」史とも「教育」史とも異なり、「学習者」への〈眼差し〉を考慮して、〈何故学ぶのか〉や〈どう学ぶのか〉という意識を問うた「学問」史を中江藤樹を起点として考察することが出来るのではないだろうか。

## 論文審査結果の要旨

本論文は、中江藤樹の学問方法論の内実を緻密に探り、その変遷を「教導」という観点から辿りなおすことによって、藤樹思想の新たな側面に光を当て、またそれを通して、儒学という「学問」が近世前期の日本社会、とくに民衆の道徳的自発性という面において、どのような機能を担おうと格闘したかについて、新たな思想史のアプローチの可能性を提示している。

まず、序章では、近世前期社会において、儒学が何よりも万人に開かれた「学問」として存在したと、とりわけ中江藤樹において、それが学習者への「教導」という明確な形で見て取れ、近世儒学思想史の出発点に位置づけなおし得ることが、問題提起されている。

続く本論は8章から構成されている。

第一章では、まず近世に紡がれた中江藤樹像を確認し、ついで真実の藤樹思想を明らかにせんと、その思想構造の独自性の解明を中心にしてきた近代以降の研究史を4つの時期に分けて整理し、それらに対して本稿の採用する接近視角がもつ意義を提示している。

第二章から第八章は、ほぼ藤樹思想（学問方法論）の変遷を時間的に辿る形で構成されている。運命をも動かし得る独自の「福善禍淫」論〈第二章〉、初学者への手立てを眼目とした経書群の再編成・注釈・祭祀実践〈第三章〉、従来注目されることのなかった真跡「持敬図」・『翁問答改正篇』の書き直しがもつ意義〈第四・五章〉、私秘性（「独」）と共通性（「講論」「対算」）の関係〈第六・七章〉、「学問」に「志を立」てることすら挫折する当時の学び手の現状とそれへの対応〈第八章〉など、従来看過されがちであった問題に斬新な光を当て、藤樹のきわめて個性的な「学問」格闘の跡をあぶり出し、その展開を適確に捉えるための論者なりの視座を提出したところに、本論文の学術的価値の核心がある。

終章では、本論の分析をふまえた上で、近世思想史における中江藤樹の位置が考察されている。

本論文は、史料用語の咀嚼と思想分析の徹底、民衆の道徳的自発性の展開を儒学の枠組みを越えて捉えるための歴史学的考察等の点で、今後の研鑽の余地を残しているが、斬新な接近視角と、丹念な史料の読み込み、かつ一貫した問題関心によって、近世前期の一儒学者の生と思想営為を再構成し得たことは、儒学研究史の上だけでなく、思想史学研究として、十分な高い評価に値する。本論文の成果が、斯学の発展に寄与するところ大なるものであることは疑問の余地がない。よって、本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。